

広報たかつき

知る 広がる 好きになる

# TAKATSUKI

*Days*

令和8年

1

No.1454

うつわの記憶



## Pick Up

- 10 新年のごあいさつ
- 12 伝統芸能文化を未来へ
- 16 地震発生！ 避難生活はどこで？
- 20 教育レポート 全国学力・学習状況調査

# 高槻は“やきもの”的 発信地だった!?



## 日本最大規模の窯跡も! やきものと古代高槻の関わり

毎日の暮らしにおなじみのうつわ。なかでも土を原料にする陶器は手に馴染むぬくもりがあり、使うほどに味わいを深めていくような魅力がある。うつわのはじまりは、1万年以上前の縄文時代の土器なのだそう。高槻でも縄文土器のほか、安満遺跡をはじめとする弥生時代の集落跡からもたくさんの中古が出土。古墳時代には土器を応用

したはにわが作られるようになるが、今城塚古墳などのはにわを作り焼いた上土室の“工場”跡は日本最大級のもの。技術も当時最先端だったという。土をこね、火で焼き上げるという素朴な営みは、文字通り“やきもの”。その歴史と文化は、古代から今日までずっと、人の暮らしとともに受け継がれている。

弥生土器（古曽部・芝谷遺跡）



「土もの」ともいわれる陶器のぼってりしたやわらかいフォルムは、古代の土器に通じる雰囲気がある



今も昔も、土を練って成型し、うつわにするのは同じ。ろくろがなかった時代は手や指先で形を整えていた



最初は野焼きしていた土器も、古墳時代には斜面に穴を掘ったあな窯でも焼かれるように。安土・桃山時代には登り窯も登場



今城塚古墳  
& 新池ハニワ工場公園  
今城塚古墳公園に復元された約190点の形象埴輪（上）。新池ハニワ工場公園には約1500年前のあな窯と工房を実物大で復元（下）

今城塚古墳は淀川流域最大級の前方後円墳

## 弥生土器

(安満遺跡)



かめ  
甕

稻作が始まった弥生時代には、火にかけて煮炊きに使われた甕で炊飯も。最大径が上部にあるのは、熱を早く伝えるための工夫だったとか

土鍋



## 弥生土器

(安満遺跡)

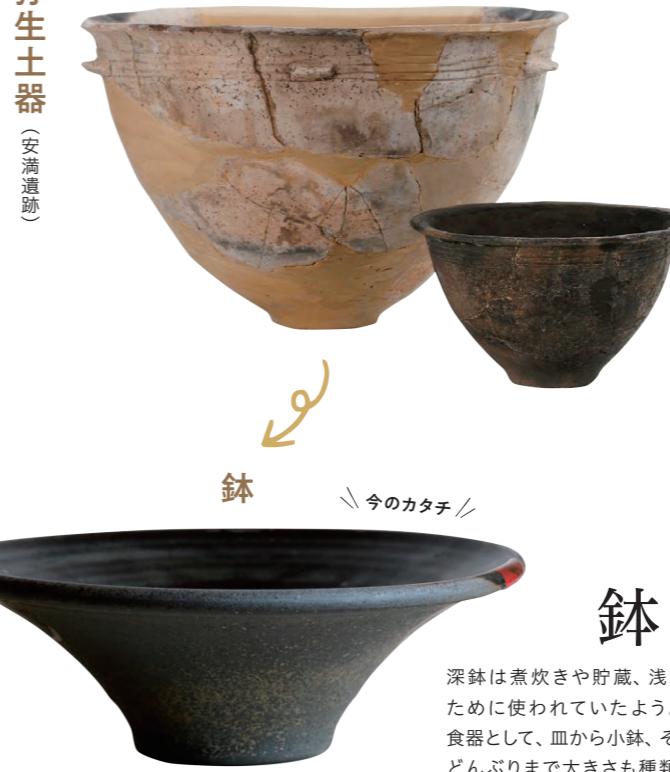


つぼ  
壺

液体を貯えるほか、保存食を作ったり食材を保管したり、水差しにも。今も用途は同じ。さらに徳利や保存容器など、さまざまな形に

## 弥生土器

(安満遺跡)



鉢

△今のかたち△

鉢

深鉢は煮炊きや貯蔵、浅鉢はものを盛るために使われていたよう。今は逆台形の食器として、皿から小鉢、そば猪口(ちょこ)、どんぶりまで大きさも種類も豊富

## やきものの歴史



## 土器と今のうつわはつながっている

### 古代から今に受け継がれるうつわのカタチ

古代から土器は、調理や貯蔵、盛りつけ用など、現代と変わらない用途で暮らしに寄り添っていた。時代とともに生活様式が変化すると種類も増え、より硬く丈夫に焼けるように進化。素焼きだった土器の表面にはガラス質の釉薬が使われるようになる。奈良時代以降は表面に光沢が出る効果を活用して表現の幅も広がり、今のやきものに近づいていく。

茶の湯の時代(安土・桃山時代)には、うつわは“もてなし”的象徴に。磁器が伝わると、陶石から作られる繊細な磁器と、土から生まれる温かみのある陶器が共存し、日本のうつわ文化を全国に広げていった。現代、うつわは使うだけでなく、楽しむものとしても、生活を豊かに彩っている。



弥生土器  
(古曾部・芝谷遺跡)



たかつき  
高坏(碗形)

高坏でも低めで碗形のものは、昔から食器として使われていた。やがて脚は小さくなり、茶わんや汁わん、どんぶり、サラダボウルなどに

弥生土器  
(古曾部・芝谷遺跡)



高台皿

△今のかたち△

高坏

供物など、台座を高くすることで盛られたものに特別な意味を持たせていた。今はフルーツや菓子などの飾り皿に。“美しく盛りたい”という思いは同じ!?



# 高槻の歴史を伝えるうつわたち



## 古曾部焼

よしたかがま  
義崇窯 (川久保)

平安歌人ゆかりで、名水が湧く地だった古曾部村で営まれた古曾部焼を、茶人としての顔を持つ寒川義崇さんが再興。茶器が中心で、地域の材木を燃やした灰を釉薬に使用する



## 3人の陶芸家が表す 高槻への思い

高槻には今、土地の名を冠したやきものがある。高槻独自のやきもの文化は、長い時を超えて、その土地に心を寄せる陶芸家たちの創作意欲をかき立てている。飛鳥・奈良時代にあったと伝承される富田焼、江戸後期から明治後期まで続いた古曾部焼は、当時の歴史を背景にそれぞれの窯元の表現を追求。今城塚古墳の近くに工房を構える今城焼は、高槻の古代陶芸文化をオマージュ。過去へのまなざしと、今を生きる感性が交わるやきものが、窯元の思いを伝えている。



## 富田焼

ゆうていよう  
游鵠窯 (富田町)

大正14年に郷土歴史学者の天坊幸彦さんが再興。今は孫の昌彦・庸子さん夫妻が引き継ぐ。昌彦さんは陶と磁の多様な技法による作品を追求。陶器中心の庸子さんは食器、陶板などを制作

## 今城焼

おほとがま  
男大迹窯 (氷室町)

陶芸家集団・FIELD土香 (どか) が古代高槻の製法を研究した独自のスタイルで作陶。当時の成分を再現した陶土に天然灰や顔料を合わせて焼き上げる、黒い焼き締めのうつわが特徴

## Interview

### 暮らしになじむ器を通じて高槻の陶芸文化を伝えたい

やすみ いちねん  
安見 一念さん (今城焼窯元 FIELD土香 代表)

高槻には、聖徳太子の曾祖父でもある繼体大王の墓とされる今城塚古墳があり、当時日本のやきもの文化をけん引していたハニワ工場跡があります。清水焼の名工、初代清水六兵衛の出身地としても知られ、やきものと縁が深い土地です。私は高槻にあった陶芸文化を再興したいと思い、この地に窯を開きました。

今城焼では当時の方法を再現しようと、左回りのろくろで成形、釉薬を使う以前の技法で黒陶色に焼き上げるなど、高槻らしい表現を追求しています。食事を盛って映えるうつわとして国内外に提案することで、高槻のやきものの魅力を伝えていきたいと思っています。

たかつきDAYS 2026.1 | 07

06 | たかつきDAYS 2026.1